

公開講演会の報告

「地上絵とミイラ：ナスカにおける学術調査と遺跡保護」

土井正樹（日本学術振興会特別研究員 PD、山形大学）

2015年3月22日に山形大学において公開講演会「地上絵とミイラ：ナスカにおける学術調査と遺跡保護」が開催された。本講演会は国際的な文化財の調査と保護に関わる複数の機関の協力により開催されたものであり、主催は山形大学人文学部・新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究 A03「アンデス比較文明論」（研究代表者：坂井正人）、共催は国立民族学博物館・科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容からみたアンデス文明史の再構築」（研究代表者：関雄二）、協力は古代アメリカ学会と文化遺産国際協力コンソーシアム、助成は国際交流基金であった。また、地方都市での開催であり、内容もやや専門的であったにもかかわらず、当日は、74名の一般市民の参加があった。

講演会ではまず、山形大学人文学部学部長であり、山形大学人文学部附属ナスカ研究所長を務める北川忠明氏、続いて国立民族学博物館の関雄二氏による挨拶があり、その後、3名の研究者による発表が行われた。最初に、「世界遺産ナスカの地上絵に関する学術研究と保護活動」というタイトルで、山形大学の坂井正人氏による発表が行われた。坂井氏の発表では、地上絵の保護活動と学術研究は一体化したものであり、保護活動のためには、まず、どこにどのような地上絵が存在するのかを明らかにする必要があることが述べられた。発表の終盤では、居住地の拡大により地上絵が消失している様子が衛星写真によって示され、遺跡破壊の深刻さと保護活動の重要性を認識させられた。

次に、長年ナスカの地上絵の保護活動に取り組んできた、ペルー国立ビジャレアル大学のミゲル・パソス氏により「ナスカの学術調査と文化遺産保護」というタイトルでの発表が行われた。パソス氏の発表はスペイン語で行われ、坂井正人氏が通訳を務めた。パソス氏の発表は、地上絵の保護活動の歴史に関するものであったが、とくに印象に残ったのは、ナスカ地域での故マリア・ライヘ氏の影響力の大きさである。役人であれ研究者であれ、ナスカ地域で調査や保護活動を行う場合にはまずライヘ氏に挨拶に行く必要がある、挨拶しなかったためにライヘ氏に訴えられ逮捕された研究者も存在するということがあった。このような慣例自体には是非があろうが、このような慣例が地上絵の保護につながっていた側面も否めないであろう。

最後に瀧上舞氏（山形大学/日本学術振興会特別研究員）から「ミイラから見る先史アンデス文明の食性」というテーマで発表があった。中心となったのは、瀧上氏が行ったミイラの毛髪による食性推定であり、とくに、毛髪を用いた分析の利点が強調されていた。内容には食性解明のための理化学的分析についての説明が含まれていたが、専門用語を極力排して、図や写真も多く用いられていたため、一般の人々にとっても理解しやすい内容であった。

若干早めに発表が終了したため、急遽質疑応答の時間が設けられた。突然の予定変更

もかかわらず、参加者からは発表者に対し活発に質問が発せられていた。その様子からは、この公開講演会が、研究成果を一般市民へ還元する場であるだけでなく、研究への一般市民の関心を喚起する貴重な機会にもなっていることを感じ取ることができた。



主催：山形大学人文学部 新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究 A03「アンデス比較文明論」（研究代表者：坂井正人）
共催：国立民族学博物館 科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（研究代表者：関雄二）
協力：古代アメリカ学会、文化遺産国際協力コンソーシアム
助成：国際交流基金